

< 特別寄稿 >

正山征洋先生のご厚意で所蔵されている「ボタニカルアート」の一部を紹介していただく事になりました。大変貴重で興味深く、芸術性も高い作品に加え先生自ら解説されています。

ボタニカルアート

九州大学名誉教授・長崎国際大学名誉教授

正山征洋先生

第15回

ナス科



Paxtonによる1834年発刊の植物雑誌を読みますと、イギリスの庭園に庭師のWaymanが南アメリカから種子を導入して育てたものが開花し、

Paxtonが新種と認め、導入した庭師Waymanの名を種名につけ、学名を*Brugmansia waymannii* Paxtonとしました。

この様に植物の学名には発見者がつけられるケースも少なくありません。

現在ではこの種はキダチチョウセンアサガオと同名となっています。

本種はナス科に属する多年生低木です。キダチチョウセンアサガオの茎葉や果実、種子等にアトロピンやスコポラピン等を含みますので、古くはエキスを胃けいれん等に用いていました。

現在ではアトロピンの製造原料とされ、副交感神経遮断薬として用いられています。

本画は1834年にパキソンにより描かれました。

